

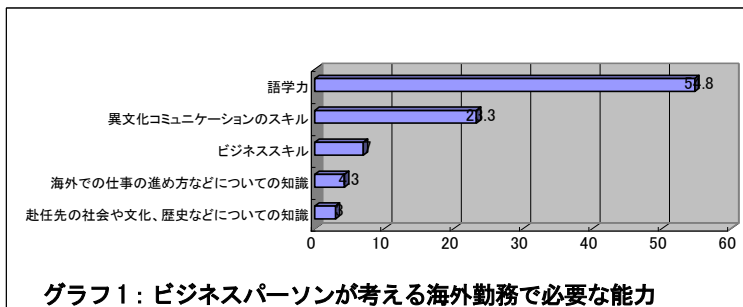
グローバル人材の育成に向けて：その理念と実践と課題  
 ——同志社大学グローバル・コミュニケーション学部取り組み——

玉井史絵（同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授）

I はじめに——グローバル人材とは？

わが国においてグローバル人材育成が急務であると言われるようになって久しいが、グローバル人材とはどのような人材のことを指すのであろうか？ 近年出版された「グローバル人材」教育に関する書籍には、いくつかの定義がある。まず、『グローバル社会の人材育成・活用』においては、「国際交流のような異文化との接触機会を通じ、積極性、好奇心、多彩な文化・生き方を理解する広範な視野と高い倫理観」を持つ人材と定義されている。日本経済団体連合会は、日々変化するグローバル・ビジネスの現場で、様々な障害を乗り越え、臨機応変に対応する必要性から、グローバル人材には「既成概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける」姿勢や、多様な文化・社会背景を持つ従業員や同僚、顧客、取引先と意思疎通を図るための「外国語によるコミュニケーション能力」、「海外の文化、価値観の差に興味・関心を持ち柔軟に対応する」能力が求められるとしている。さらに、経済産業省と文部科学省の合同委員会では、「主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドを持つ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的バックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値観を生み出すことができる人材」とグローバル人材を定義している

（『グローバル・キャリア教育』）。これらの定義に共通するのは、高度な外国語コミュニケーション能力という技能と、積極性、柔軟性、チャレンジ精神といった資質を併せ持つ人材であるという点である。これは、産業能率大学が2010年



グラフ1：ビジネスパーソンが考える海外勤務に必要な能力

に海外勤務経験を持つビジネスパーソンを対象に行った調査結果とも一致している（グラフ1）。海外勤務に必要な能力をひとつ選択したところ、「語学力」（54.8%）や「異文化コミュニケーションの能力」（23.3%）は、「ビジネススキル」（7.0%）や「海外での仕事の進め方などについての知識」（4.3%）を大きく引き離れた。

II 同志社大学グローバル・コミュニケーション学部の理念と実践

II-i 人材育成の理念

このような社会の要請に応えるべく、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部（以下 GC 学部）は、グローバル社会で通用する卓越し外国語コミュニケーション能力を有する人材育成を教育目標に掲げて、2011年4月に開設された。1学年あたりの学生数定員は英語コース80名、中国語コース40名、留学生を対象とした日本語コース30名の計150名で、同志社大学のなかでは少人数の学部のひとつである。これに対して教員数は、英語コースは英語17名（うち native speaker 5名）、ドイツ語2名（1名）、フランス語2名（1名）、中国語コース5名（2名）、日本語コース3名の計29名である。本学部は学部教育とともに同志社大学全学の外国語教育も担っているので、学生数に比して多くの教員が配置されている。

GC 学部は人材育成の指針として以下の3つを掲げている。

- 1) 高度な外国語コミュニケーション能力を習得するとともにグローバル社会および異文化を理解できる。
- 2) グローバル社会に関する幅広い教養と外国語運用能力を基礎に、高い倫理観をもってコミュニケーションの橋渡しができるようになる。
- 3) 卓越した外国語運用能力を駆使して、グローバル社会の諸分野で facilitator、negotiator、administrator として活躍できるようになる。

グローバル化が進む現代、我が国が必要としているのは、世界に向かって我が国の文化や科学技術を発信し、世

界と日本の架け橋となれる優れたコミュニケーションの担い手である。GC 学部では、そうした役割を果たしうる人材の育成をその目標としているのである。

## II-ii カリキュラム設計

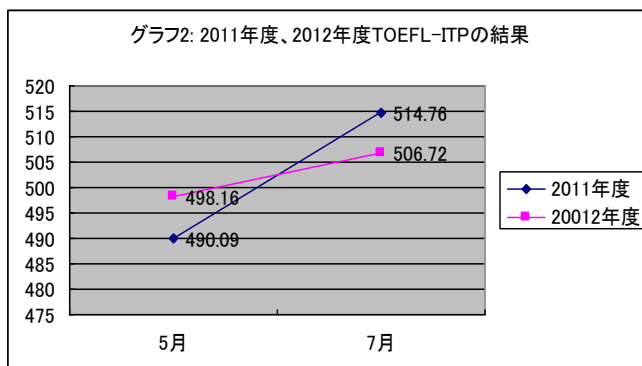
上記の人材育成の目標を達成するため、GC 学部では英語・中国語コースでは、1 年間の留学である Study Abroad (以下 SA) を必修とし、この SA を機軸として、SA 前、SA 期間中、SA 後、それぞれの段階でグローバル人材に必要な技能と教養を修得できるよう、効果的な学びの体系を構築している。たとえば、英語コースは以下のような実践と教養のバランスの取れたカリキュラム設計により、グローバル人材に必要な卓越したコミュニケーション能力の育成にあたっている。

- 1) SA 前：少人数クラスで教員が学生一人ひとりをきめ細かく指導し、体系的・段階的カリキュラムに沿って SA に必要な外国語の能力を確実に強化する。「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」という技能別の英語のクラスが週 4 コマ、TOEFL 準備のクラスが週 1 コマあり、SA に必要な英語力を確実に伸ばせるように設計されている。加えて春学期は英語圏の文化に関する講義、秋学期は日本文化に関する講義が英語で提供され、学生たちがそれぞれの文化に対する知識とともに、ノート・テイキングなどのアカデミック・スキルも身に付けることができるようになっている。
- 2) SA 期間中：5 カ国 13 大学と提携して、学生のレベルに応じた、様々な履修形態のプログラムを提供している。学生全員に ESL とアカデミック（人文・社会科学の分野の正規科目）の両方を履修させることにより、外国語運用能力を伸ばさせるとともに、言語、文化、社会に関する幅広い教養と、論理的な思考力と表現力を身に付けさせる。ESL、アカデミックともに SA 先で取得した単位は、科目の内容と学修時間に応じて、本学部の単位として認定される。
- 3) SA 後：実践と教養のバランスの取れた科目群を配置し、SA で身に付けた外国語の力を更に伸ばすと同時に、コミュニケーションという現象を言語、文化、社会のあらゆる側面から考察し理解を深めさせる。英語コースではビジネス英語、プレゼンテーション、交渉術など、社会で求められる英語力習得のための上級外国語科目群を設置している。更に専門講義科目は約 3 分の 1 が英語で提供され、知識とともに英語を使用して学ぶ能力を涵養する。また、3・4 年次必修の Intermediate Seminar 1, 2 と Advanced Seminar 1, 2 の一部は英語で提供され、英語による論理的思考力・表現力を高める。さらに、カリキュラムのもう一つの柱であり、本学部の 4 年間の学修の集大成である 3 コース共通の Seminar Project では学生自身が国際会議や文化交流などの事業を企画、立案から運営にまで携わる。学生の主体性を重視したアクティブ・ラーニングを通じて、グローバル社会で通用するコミュニケーション能力に加え、事業を遂行する実行力や問題解決能力を養うことを意図している。

## II-iii 2 年間の成果

GC 学部は開設して 2 年が経過した段階なので、その成果についても現段階での限定的なものとなるが、英語コースを例にとると、以下のような成果を上げている。

- 1) SA 前の学修の成果としては、英語能力の伸びを上げることができる。英語コースでは 1 年次 5 月、7 月の 2 回、TOEFL-ITP を実施しているが、2011 年度 5 月の平均点 490.09 に対し、7 月の平均点は 514.76、2012 年度 5 月の平均点 498.16 に対し、7 月の平均点は 514.76 であった(グラフ 2)。



いずれの年度も t 検定の結果、有意差が認められた。

- 2) SA 前の 1 年次生たちの自主的な学修の取組みも特筆に値する。GC 学部にはパソコン、多読用の書籍、各種外国語能力試験・検定対策用の書籍などが備えられた学部生専用の自学自習室がある。この自学自習室の 4 月から 12 月の学期期間中の利用者数は、月あたりの延べ人数で平均 630 人であった。一日平均では 20 名から 30 名で、英語コースの定員が 80 名であることを考慮に入れると、およそ 3 分の 1 の学生が利用したことになる。また同志社大学が毎年 1 年次生、3 年次生を対象実施している「キャンパスライフに関するアンケート調査」の 2011 年度の結果によると GC 学部学生の授業外学修時間数は 10.1 時間で、同志社大学全体の平均 4.8 時間を大幅に上回った。
- 3) SA 期間中の学修の成果としては、2011 年 2 月から 4 月にかけて 13 大学に SA に出発した第 1 期生 75 名

ほぼ全員が2012年度秋学期(9月)からは正規科目を履修し、うち、約95%が正規科目の単位を取得したことが上げられる。大学間で違いはあるものの、正規科目履修のためには、TOEFL-ITPでおおよそ550点レベルの英語力が必要とされることから、SA前、SA期間中の外国語能力の伸長が確認できる。

- 4) こうした学修面での成果に加え、学生たちの学校行事への積極的参加も成果のひとつとして挙げることができる。学生たちはオープン・キャンパス等の学校行事に自主的に参加し、自らの言葉で学部をPRするプレゼンテーションを行ってくれた。こうした取組は、卓越したコミュニケーション能力育成を掲げるGC学部の教育方針とも合致している。

### III 結び——同志社大学グローバル・コミュニケーション学部の課題

#### III-i 当面の課題

これまでGC学部の理念と実践について述べてきたが、結びとして今後の課題について考察したい。まず、SA後の教養と実践のバランスの取れたカリキュラムの理念を実現することが挙げられる。GC学部では英語コースの第1期生が1年間のSAを終えて帰国した。SA期間中とSA後の教育が有機的に関連させ、SAを通して身につけた外国語能力がさらに伸長するとともに、コミュニケーションに関する理論面での理解も深め、実践的外国語能力とともに教養と論理的思考力・表現力をも涵養するというGC学部の人材育成の目標が達成できるのか、真価が問われるときである。特に実践面では、カリキュラムの柱でもある4年次のSeminar Projectを成功させることが重要となる。学生自身が国際会議や文化交流などの事業を企画、立案から運営にまで携わるSeminar Projectでは、従来型の授業とは異なる教師の指導力も求められる。GC学部では開設初年度から担当者が定期的にミーティングやセミナーを実施して、準備を行っている。さらに、4年間の課程を修了した学生たちの就職も大きな課題である。学部では独自の就職セミナーを実施し、学生の意識を高める試みを行っている。

#### III-ii 結びにかえて——「人材」育成か「人間」育成か？

以上、「グローバル人材の育成に向けて：その理念と実践と課題」という本シンポジウムのトピックに沿って同志社大学グローバル・コミュニケーション学部の理念・実践・課題を紹介してきた。わが国の大学は長いあいだ社会に出るまでのモラトリアム期間と位置づけられ、専門に対する知識と教養を深めるということ以上の教育は期待されていなかった。「人材」育成は卒業後に企業によって行われるという暗黙の了解が成り立っていたのである。だが、グローバル化が進展し、急速に変化する社会にあって企業が即戦力となる人材を求めようになり、大学に人材育成の役割を担うことが期待されるようになった。たしかに、これまで多くの大学が、めまぐるしく変化する時代に対応できる柔軟性や社会で役立つ技能を持った「人材」を育成するという意識に欠けていたことは否めない。

だが一方で、大学は、時代の変化に左右されない価値観、主体的に物事を考える思考力、他者と共感できる感受性を併せ持つ「人間」の育成という役割も放棄するべきではない。技能に加えてこうした資質を持った人間こそが、いかなる状況においても困難を克服し実力を発揮できるからである。じっさい、経済同友会や経団連の行った調査によると、企業が新規採用にあって重視するのは「熱意・意欲」、「行動力・実行力」、「協調性」「論理的思考力」、「主体性」、「責任感」といった人間性のほうである。

「わが国や世界中の地域とのコミュニケーションが発達した結果、あらゆる人々が十倍もの努力をして競争に加わっている。・・・この競争に遅れをとり無関心でいると単にゴールにたどりつけないだけなら、多くの人々は喜んで立ち止まるだろう。けれども、この国で現在進行中の商業、貿易の性質上、努力を怠ることはすべてに失敗することを意味するのである。」驚くほど今日的に響くこの文章は、じつは1839年に書かれた本の一節である(Sarah Ellis, *Woman's Mission*)。私たちは今日、熾烈な競争社会にあってその競争に勝たなくてはならないという一種の強迫観念に取り付かれているが、こうした意識は少なくとも19世紀半ばに既にあったのである。私たちが「グローバル人材」と呼ぶ人間の育成という課題も、じつは200年近くのあいだ、社会が向き合ってきた課題といえよう。私たちはそうした大きな流れのなかで、教育の役割とは何かを問い続ける必要がある。

#### 参考文献

- 友松篤信編『グローバル・キャリア教育——グローバル人材の育成』(ナカニシヤ書店：2012年)  
デロイト トーマツ コンサルティング編『世界で勝ち抜くためのグローバル人材の育成と活用』(中央経済社：2011年)  
樋口美雄編『グローバル社会の人材育成・活用』(勁草社：2012年)